市史通信

【目次】
●ハマのモダンボーイ・モダンガール
●横浜市史資料室所蔵「関東大震災」画像データ目録の整備
●台所ゴミで豚を飼う
●展示会アンケートより
●横浜市史資料室刊行物コーナー
●市史資料室たより

海港文学の会創立茶話会に参加したＲＪＲ横浜支部の女性たち　右から4人目が篠原あや
1940(昭和15)年3月10日　篠原あや資料

第13号
【発行日】2012年3月31日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/housei/sisi/

ハマのモダンボーイ・モダンガール

一昨年開催した展示会「戦後横浜の復興を支えた文化人たち―牧野勲をめぐる人々―」と記念講演会の内容を、記録として留めると共に、関連して行った調査の結果をまとめるため、報告書『横浜の文化人と戦後復興』を刊行する。

戦後横浜の文化人たち

同報告書では、戦後復興期から高度経済成長期にかけて多彩に繰り広げられた文化行事の様子について紹介している。これらの文化行事の中心となった牧野勲や北林透馬など、この時期に活躍した文化人たちは、世代的にいえば明治後半に生まれ、昭和初期にいわば青春時代を過ごした人々であった。

震災復興を経て花ひらいたモダニズム文化の洗礼を受けた彼らは、戦後の荒廃した横浜の地で文化の再興、そして横浜の復興を目指し、様々な文化行事を開催し、文化団体を立ち上げたのである。

その時、彼らが頭に思い浮かべた横浜の文化とはどのようなものだったのだろうか。一九五七（昭和三二年）年一〇月、翌年迎える開港百年の前夜祭とばかりに、東京の文化人を招いて「どッこいこゝらで伊勢ぶら会」という催しが開かれた。戦後一二年を経過して、市中心部の接収解除も徐々に進み始めた頃である。

その案内は、「ヨコハマのエキゾチックはそゞろの足どりながら昔にかえりつゝあります。」と、「哀愁のミナト町、ヨコハマ」へといざなっていた（横浜市史資料室所蔵「牧野勲関係資料」）。

さらに、発起人依頼状では、この間の横浜を次の様に描写している（同前）。

「この半歳ほどの間に、ヨコハマはめっきり変貌しました。戦後のざわめきから開放されてむかし風のエキゾチックが甦生って来たのです。自動車の警笛の少ないヨコハマは絶好の散歩場所です。これが東京から二十分か三十分の土地かと思われるほどであります。」

これらの文章に、彼らが抱いていたヨコハマの姿が凝縮されている。エキゾチック、すなわち異国情緒にあふれた港町ヨコハマが甦るのを、彼らは待ち望んでいたわけである。それは、東京とも異なる独特のものであるはずだった。しかし、この三年後にやはり東京の作家らを招いて行ったヨコハマ散歩では、徐々に進む復興の姿にむしろ、「ハマだけの持ち味が消えた」「バラエティーがなくなった。」という感想がもれた（『神奈川新聞』一九六〇年七月六日）。

横浜の復興は、ヨコハマ文化の復活という意味では、必ずしも彼らの思うようには進んでいなかった。しかし、彼らはあくまで横浜にこだわり、横浜

らしさを追い求め、新たなヨコハマ文化の創造を信じた。そのためか、彼らの文化行事は、明るさと楽天性を失わなかった。

その基盤となっていたのは、彼らが育まれたモダニズム文化だったのではないだろうか。彼らが求めるヨコハマ文化の根源を確認する意味で、報告書の前史ともいえる、昭和戦前期における文化人たちの動きを以下追ってみたい。

牧野勲は明治四〇年（一九〇七）生まれ、北林透馬は明治三七年、その他文化行事の常連たちの生年を見てみると、安藤不二夫が明治三七年、岩佐東一郎が明治三八年、扇谷義男が明治四五年、近藤東が明治三七年、志村立美が明治四〇年、高見保太郎が明治四一年、松島一郎が明治三五年などと、明治三〇年代から四〇年代に集中している。明治二五年（一八九二）生まれの飯田九一や、明治二八年の早川右近、それに明治二一年生まれの半井清らは長老格といったところか。また、大正六年（一九一七）生まれの篠原あや、大正二年の中山富久らは、若手といえよう。

ハマのモダンボーイ

牧野は一八歳で、北林は二一歳で、昭和の時代を迎える。北林はその頃から清水孝祐の名で詩や評論を発表し、一九二九（昭和四）年一〇月から翌年二月にかけて『横浜貿易新報』に「波斯猫」という小説を連載している。そして一九三〇年に、中央公論社が募集した「文壇アンデパンダン」で「街の国際娘」が入選を果たして、本格的に文壇にデビューした。この頃から、ペンネームを北林透馬と改め、『婦人画報』『婦人公論』『令女界』といった雑誌に執筆、連載するようになった。

モダンボーイ・モダンガールという言葉をはやらせたのは、評論家新居格と言われるが、その新居がモダンボーイの典型として、清水孝祐すなわち北林をあげている（『モダン日本』一九三〇年一一月号）。この頃から戦中期にかけての北林については、報告書掲載の丸岡澄夫「北林透馬の戦前・戦後」を参照願いたい。

一方、牧野勲は、近代映画の最新技術を日本にもたらしたといわれるヘンリー小谷の助手を経て、『横浜毎朝新報』の記者となった。一九二九年・三〇年頃には、『横浜毎朝新報』・『横浜毎日新報』に映画関係の記事を盛んに書いていた。同じ頃、牧野はダンスホール・メトロポリタンにも関わっていた。いとこに当たる牧野晴（バイオリン奏者）がマネージャー、勲がサブ・マネージャーだった。

このように当時のモダニズム文化の最先端ともいえる映画やダンスホールに関わっていた牧野勲もまた、「横浜のモダンボーイとして知られて」いたという。牧野をそう評した『横浜毎日新報』の記事は、彼が「フリー・ランサー・レポー即ち無所属探訪記者」となったことを紹介している（一九三一年二月六日）。新聞・雑誌にフリーで「特種」を提供する「新聞界には珍しい」「珍職業」という触れ込みだった。ここにも、時代の先端を行くモダンボーイぶりが現れていたといえよう。

これ以降牧野は、同年六月発行のダンスホール・メトロポリタン広報誌『メトロポリタン』（「牧野勲関係資料」）や、一九三三年五月に創刊された横浜地域の映画雑誌『ヨコハマ松竹』（横浜開港資料館所蔵）の編輯兼印刷発行人として編集にたずさわっている。

『ヨコハマ松竹』では、「ヨコハマと松竹スター」という俳優の紹介記事を書いている。横浜でドイツ人の父と日本人の母の間に生まれた江川宇礼雄、母がイギリス人の血を引く竹内良一（岡田嘉子の元夫）、横浜にあった大正活映の竹村信夫などを取り上げている。牧野は彼らと横浜で接点があり、映画界の事情にも深く通じていた。このように牧野がダンス業界や映画業界に通じていたことが、フリーの記者として活躍する背景にあったのである。

『ヨコハマ松竹』の表紙・裏表紙は、北林透馬原作の松竹映画「港の日本娘」のイメージと宣伝で構成されていた。また、北林の長編小説「国際娘マリ」連載第一回が掲載されている。まさに、北林透馬特集ともいえた。このことからは、牧野と北林の強い結びつきを読み取ることができる。なお、『ヨコハマ松竹』の表紙・裏表紙の画像や、「港の日本娘」について詳しくは、丸岡澄夫「ハマの作家・北林透馬」（『映画論叢』28、二〇一一年一月一五日）を参照されたい。

一九三三年の夏頃、北林と牧野らは海港文学の会を結成する。ところが、牧野はその直後の秋に、横浜を離れて満州に渡った。「不景気が深刻だったのだろう、食いつめてしまった。」（牧野イサオ「困った顔」『横浜詩人会通信』№49、一九六八年五月一日）と自ら記しているが、奉天毎日新聞に招かれたともいう。ともかく牧野の不在により、海港文学の会は頓挫した。

ハマのモダンガール

牧野の留守中、一九三四年九月に北林は余志子と結婚した。翌年、『令女界』に「青銅の聖母」を連載し、その読者グループの文学少女たちが北林の周囲に集まるようになった。後に横浜を代表する詩人となる篠原あやも、その取り巻きの一人だった。

篠原が後に『横浜詩人会通信』や『横浜文芸懇話会会報』に書き記した記録によれば（主なものは報告書に収録）、一九三五年の秋、全国的な令女界のグループとしてR・J・R（令女純情聯盟）が発足し、第一回の催しとして森永鶴見工場の見学を行ったという。翌年一月、篠原の呼びかけにより伊勢佐木町松屋で横浜支部が結成される。二

月一一日、篠原と横浜支部の何人かは、山手牛坂にあった北林透馬邸を訪問し、この時初めて北林と対面した。

その後はたびたび北林邸を訪問するようになり、R・J・R横浜支部の集まりにも常に北林が参加して、三ツ池にピクニックに行ったり、クリスマスパーティーを開いたりした。篠原あや氏の手許に残された当時の写真を見ると、まさにモダンな文学少女たちが青春を謳歌している姿であった。ただし、その服装は和服も多く、モダンガールのイメージに合うような洋装は少ない。時代の象徴としてトピック的に示される姿と、現実生活の中の姿との違いといえようか。

上：北林透馬邸にて　左端北林透馬、その右に篠原あや　年不詳　下：RJR京浜支部三ツ池ピクニック　1940年6月16日
いずれも篠原あや資料

一方、同じアルバムには、軍病院に入院中の若い兵士達の姿が大勢写っている。おそらく、一九三七年の日中戦争勃発後に傷病兵の慰問として、写真や手紙を交換していたものだろう。

その頃、牧野も満州で体調を崩して帰国していた。また、R・J・R横浜支部は一九三九年から翌四〇年にかけて、北林を顧問に会誌『紫苑』を発行したという。牧野の帰国とこうした動きが重なって、再び海港文学の会を結成しようという機運が高まる。一九四〇年一月に北林・牧野が中心となって海港文学の会を結成し、同年三月一〇日、横浜桟橋帝国ホテル食堂にて創立茶話会を開催することとなった。創立茶話会には、北林に誘われてR・J・R横浜支部の篠原らも出席している。

この間、牧野は布哇報知の横浜通信部を南仲通りに開き（『横浜貿易新報』三月六日）、海港文学の会の事務所もそこに置かれることになった。そして、海港文学の会は三月から七月までの四ヶ月間、『横浜貿易新報』の文芸欄を担当することになり、篠原ら若い文学青年・少女も作品を発表した。三月一六日の文芸欄には、篠原の本名田中佐和子名で詩三編が掲載されている。

篠原はまた、『若草』という詩の雑誌の読者でもあった。同年四月二一日、馬車道の喜久家フルーツパーラーで東京若草詩会とR・J・R横浜支部の合同茶話会を開いた。この時の出席者には、北林夫妻に加え、牧野の顔も見える。これをきっかけとして、R・J・R京浜支部と横浜若草詩会ができた。その事務所もやはり、牧野の布哇報知通信部に置いてもらったという。しかし、篠原によればこの集りが戦前最後となった。

戦争と文化人

牧野は日米開戦を前に、布哇報知通信部を閉め、再び満州に渡って奉天毎日の記者となった。その後、満州から北京に移り、いくつかの新聞の記者を経て、戦後引き揚げることになる。北林は、一九四一年一一月に報道班員として徴用されてビルマに派遣され、そこで開戦を迎えている。帰国後は横浜にとどまり、軍需工場に訓育係として勤めた。自宅は、一九四五年五月二九日の横浜大空襲で全焼する。

こうして牧野・北林の戦前の動きを見ると、昭和戦前期に花ひらいたとされるモダニズム文化がすでに戦争と無縁でなかったことに改めて気づかされる。ダンスホールも満州事変後統制が厳しくなり、日中戦争勃発後一、二年でほとんど姿を消すことになる。こうした統制から逃れるように、牧野は満州に渡り、旧知のダンスホール関係者らと再会して、一時的な解放感を感じたようだが、彼もまた叔父が創刊した新聞である布哇報知をやめざるを得なかった。

北林はビルマ戦線に派遣され、マラリアにかかるなど、さらに直接的な戦争体験をすることになる。文学少女篠原もまた、参加していた文芸誌『浪漫』の関係者に左翼活動家がいるということで、特高警察に検挙された経験を持つ。

こうした戦争体験からすれば、荒廃したとはいえ、戦後にもたらされた自由の下で、抑圧されていた様々な文化の可能性に再び光りが当てられたのである。戦後の文化の復興に、彼らが大きな期待をかけた由縁であろう。戦後多くの文化人が牧野・北林らの文化行事に参加したのも、彼らの喪失感を埋め、新たな文化の創造に大きな希望を抱かせたからだろう。

（羽田博昭）